

マネトンによるファラオ 「セソーストリス」の位置づけ

星 野 宏 実

はじめに

前3世紀のエジプト人神官マネトンは、ギリシア語で『エジプト史 Αἰγυπτιακά』を記した。これは、エジプトの神話の時代から王朝時代までの通史を扱った歴史書である¹⁾。『エジプト史』における王朝時代の記述は、議論の余地を残すものの、エジプト古来の史料との時系列の一致から一定の史実に基づくことが認められる²⁾。D. B. Redfordは、エジプト固有のいわゆる「王名表」の系統を明らかにする中で、マネトンの『エジプト史』を「王名表」の伝統を継承した作品として、王朝時代の文化の中に位置づけた³⁾。特に、『エジプト史』では歴代の王が第1王朝、第2王朝と王朝毎に分けられナンバリングされる⁴⁾。このマネトンによる王朝区分は、現在のエジプト学における時代の指標として採用されてお

-
- 1) 本稿において、王朝時代とは、前3100年頃の上下エジプト統一から、前332年のアレクサンドロス3世による征服までの、いわゆる古代エジプト諸王朝の時代を指すこととする。
 - 2) 『エジプト史』で採用される王名の多くは、著者であるマネトンによって独自にギリシア語に変換されたものであり、実在のファラオとの同定が困難な場合がある。王名の変換についてはG. P. Verbrugghe and J. M. Wickersham, *Brossos and Manetho, Introduced and Translated*, Michigan, 1996. また、マネトンが記す王の治世年数は、しばしばあまりにも現実離れた長い年数のものもあり、それらは現在のエジプト学における認識と異なる。なお、本稿において、基本的に君主は「王」と記すが、文脈上エジプトの支配者としての面を強調する際は、「ファラオ」という名称を使用していく。
 - 3) D. B. Redford, *Pharaonic King-lists, Annals, and Day-books: a Contribution to the Study of the Egyptian Sense of History*, Mississauga, 1986, pp. 335–336.
 - 4) こうした区分も、王朝時代にその萌芽が確認できる。特に『エジプト史』とトリノ王名表との類似点は、多くの研究者が指摘するところである。W. G. Waddell, *Manetho*, Cambridge, MA., 1940, p. xxii; A. H. Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, Oxford, 1961, pp. 47–48; Verbrugghe & Wickersham, op. cit., pp. 105–6; Redford, op. cit., pp. 1–13.

表①：王朝時代区分表

(Cambridge Ancient History 3rd ed. vol. 1, part. 2 - vol. 6, Cambridge, 1971 - 1994)

時代区分	王朝区分	年代
初期王朝時代	第1王朝	前3100 - 前2890年
	第2王朝	前2890 - 前2686年
	第3王朝	前2686 - 前2613年
古王国時代	第4王朝	前2613 - 前2498年
	第5王朝	前2494 - 前2345年
	第6王朝	前2345 - 前2181年
	第7王朝	前2181 - 前2173年
第一中間期	第8王朝	前2173 - 前2160年
	第9王朝	前2160 - 前2130年
	第10王朝	前2130 - 前2040年
中王国時代	第11王朝	前2133 - 前1991年
	第12王朝	前1991 - 前1786年
第二中間期	第13王朝	前1786 - 前1633年
	第14王朝	前1786 - 前1603年
	第15王朝	前1674 - 前1567年
	第16王朝	前1684 - 前1567年頃
	第17王朝	前1650 - 前1567年頃
	第18王朝	前1567 - 前1320年頃
新王国時代	第19王朝	前1320 - 前1200年
	第20王朝	前1200 - 前1085年
第三中間期	第21王朝	前1085 - 前945年頃
	第22王朝	前945 - 前715年頃
	第23王朝	前818 - 715年頃
	第24王朝	前727 - 前715年頃
	第25王朝	前745 - 前655年頃
末期王朝時代	第26王朝	前664 - 前525年
	第27王朝	前525 - 前404年
	第28王朝	前404 - 前399年
	第29王朝	前399 - 前380年
	第30王朝	前380 - 前342年
	第31王朝	前342 - 332年

り、その基礎を形成しているといえるだろう(表①)。また、『エジプト史』には、ギリシア世界の事象も複数扱われる。近年では、J. Dilleryや、I. S. Moyerによって、こうしたギリシア世界に関連する記述が着目され、『エジプト史』とギリシアの歴史叙述との関係について活発な議論が展開されており、『エジプト史』の新たな側面が見出されつつある⁵⁾。

王朝時代のエジプト史は、マネトン以外のギリシア・ローマの作家たちにも広く扱われてきた。特に、前5世紀のヘロドトスの『歴史』や、前1世紀のディオドロス・シケロスの『ピプリオテーケー』は、マネトンと同じく初代から作家自身の時代まで下るエジプトのファラオ(王)たちを扱っている。しかし、ヘロドトス、マネトン、ディオドロスのエジプト王朝史は必ずしも一致するものではなく、特に、ヘ

ロドトスとディオドロスの記述には、時系列の混乱や王の創作が確認される。その中で共通して登場し、かつ存在感を放つのが、セソーストリス(Σέσωστρις)あるいはセソオーシス(Σεσόωσις)として示される人物である。

このセソーストリスは、特定のファラオとの同定が困難な登場人物である。それにも関わらず、この人物は上記の三者以外にも多数のギリシ

5) J. DilleryはThe First Egyptian Narrative History; Manetho and Greek Historiography, *ZPE* 127, 1999, pp. 93 - 116をはじめとする諸論文や、著書 *Clio's Other Sons, Berossus and Manetho*, Michigan, 2015で、マネトンの『エジプト史』を包括的に扱う。またI. S. Moyer, *Egypt and the Limits of Hellenism*, Cambridge, 2011, pp. 84 - 141は、『エジプト史』の内容とプトレマイオス朝の政策との関連性を見出している。これらの先行研究については、星野宏実「マネトン『エジプト史』とヘレニズム世界—プトレマイオス朝エジプトにおける歴史認識の変化—」『史窓』75、2018年、1 - 22頁を参照。

ア・ローマの著作に登場する。本稿では、このセソーストリスに着目し、先行研究の整理と共に、マネトン『エジプト史』と他のギリシア語あるいはラテン語作品との比較を行う。これによって、マネトン『エジプト史』を、ギリシア歴史叙述の伝統に位置づける試みの一端としたい。

1. ヘロドトスによるセソーストリスの提示

(1) ヘロドトスのセソーストリス

セソーストリスのギリシア語文献における初出は、前5世紀のヘロドトス『歴史』である⁶⁾。ヘロドトスは『歴史』第2巻で、エジプトの風土やナイル川の氾濫、エジプト人の風習について自らの見解を明らかにした後、次のように述べる。

「これまでは私が自分の眼で見たこと、私の見解および私の調査したところを述べてきたのであるが、これからはエジプト人の話してくれたことを、私の聞いたとおりに記してゆくことにしよう⁷⁾。」

ヘロドトスは、以後の記述は伝聞であることを明記し（後にその情報源をエジプト人神官であると明らかにする）、エジプトの歴代の王について述べる（表②）。神官たちはヘロドトスへ、初代のミンの後330名の王が存在し、女王ニトクリスとモイリス以外の王については「光彩を放つ人物は一人もいなかった」と伝える⁸⁾。そこで、ヘロドトスは「これらの諸王のことは措き」、331名の後に続く王セソーストリスについて語り始める⁹⁾。ヘロドトスが伝えるセソーストリスの業績やエピソードをまとめると、次の通りである。

6) A. B. Lloyd, *Herodotus, Book II, Commentary 99-182*, Boston, 1962, p. 16.

7) Hdt., 2, 99. 以下、ヘロドトス『歴史』の日本語訳は、松平千秋訳（ヘロドトス『歴史』岩波書店、1971年）を使用する。ただし、王名については、本稿の表記に統一させた。

8) Hdt., 2, 100; Lloydによれば、この王の人数は神官の語る初代の王ミンから、セトス（表②、No. 14）までの諸王の合計人数であるとする。D. Asheri, A. Lloyd, and A. Corcella, *A Commentary on Herodotus Books I-IV*, Oxford, 2011, p. 312. しかし、ヘロドトスは330名の最後の王をモイリスと述べており（Hdt., 2, 101）、その後セソーストリスが即位したことを伝えているため、ヘロドトスの記す330名の王はミンの次代からモイリスまでを指すと思われる。藤縄謙三、『歴史の父ヘロドトス』、新潮社、1989年、167-168頁、170頁。

9) Hdt., 2, 101-102.

4 マネトンによるファラオ「セソーストリス」の位置づけ

表②：ヘロドトス『歴史』登場エジプト王一覧

(D. Asheri, A. Lloyd, and A. Corcella, *A Commentary on Herodotus Books I–IV*, Oxford, 2011; *Cambridge Ancient History*, 3rd ed, vol. 1, part. 2 – vol. 6, Cambridge, 1971–1994参照)

No	第2巻	王名	出自	同定される実在の王/ (王朝、即位順)	在位 年数	主な事績、特記、他
1	99	ミン		メネス (第1王朝、初代)		メンフィスの創設、 プタハ (ヘバイスト ス) 神殿の設立
2	100	ニトクリス		(第6王朝、8代目 (?))		女王。兄弟王の仇討ち。
3	101	モイリス		アメンエムハト3世 (第12王朝、6代目)		湖の開鑿。湖中のピ ラミッド建設。
4	102	セソーストリス	モイリスの後の王	センウセレト1世(第12王朝、2代目)/ センウセレト3世(第12王朝、5代目)		アジア、ヨーロッパ、 スキュタイ、トラキ アへ遠征
5	111	ペロス	セソーストリスの息子	アメンエムハト2世か (第12王朝、3代目)		
6	112	プロテウス	メンフィス出身	特定できず		
7	121	ランプシニトス		ラムセス (第19王朝/第20王朝)		
8	124	ケオプス		クフ (第4王朝、2代目)	50	ピラミッド建設
9	127	ケブレ	ケオプス弟	カフラー (第4王朝、4代目)	56	ピラミッド建設
10	129	ミュケリノス	ケオプス息子	メンカフラー (第4王朝、6代目)		ピラミッド建設
11	136	アシュキス		シェションク1世 (第22王朝、初代)		
12	137	アニュシス	アニュシス出身	特定できず (第23王朝 (?))		エチオピア王サバコ ス (シャバカ) 来攻
13	137	サバコス	エチオピア出身	第25王朝、初代	50	夢の神託によりエジ プト撤退
14	141	セトス	ヘバイストス祭祀	シャバタカ (第25王朝、2代目)		
15	147	12人の王				モイリス湖「迷宮の 建設」
16	151	プサメティコス	ネコスの子	プサメティコス1世 (第26王朝、2代目)	54	「兜事件」→沼沢地 帯へ追放、イオニア 人及びカリヤ人の支 援、「陣屋」の提供
17	158	ネコス	プサメティコス息子	ネコ2世 (第26王朝、3代目)		紅海に運河開拓着手 →神託で中止
18	159	プサンミス	ネコスの子	プサメティコス2世 (第26王朝、4代目)		エリス人の来訪
19	161	アプリエス	プサンミス息子	(第26王朝、5代目)	25	キュレネでの大敗→ 反乱
20	162	アマシス		(第26王朝、6代目)		アプリエスへの反旗

・遠征活動

- ①艦隊を率いてアラビア湾、紅海の沿岸住民を征服 (ヘロドトス『歴史』、第2巻、102)¹⁰⁾
- ②アジア～ヨーロッパ、スキュタイ人およびトラキア人を征服。
最遠はパシス河畔 (同上、103)
- ③エチオピア征服 (同上、110)

・征服地への記念碑の建立 (同上、102)

・弟の謀反 (同上、107)

10) 当時のアラビア湾、紅海は現在の認識とは異なる。アラビア湾は現在のスエズ湾を、紅海は現在のインド洋を指す。Asheri, Lloyd, & Corcella, op. cit., p. 313.

地図①：アジア周辺地図

(C. H. Oldfather, *Diodorus of Sicily*, Cambridge, 1933を参照し、筆者作成)



- ・運河の開鑿（同上、108）
- ・国土分配と税制の整備（同上、109）
- ・ヘパイストス神殿のダレイオス1世のエピソード（同上、110）

このセソーストリスの業績を一見して分かる通り、彼の最も顕著な活動はエジプト国外への遠征活動である。ヘロドトスはセソーストリスの遠征先について、北は黒海東岸地域のパシス河畔、南はエチオピアに至ったと言及している。A. B. Lloydによれば、パシス川は、当時ヨーロッパとアジアの境界として認識されていた¹¹⁾。これは、実際の征服範囲を示すと共に、当時の読者にその遠征がかなりの広範囲に渡ったことを示す一定の指標となっただろう。

さらに、この王のエピソードで目を引くのが、征服地への記念碑の建立である。

ヘロドトスによれば、

「セソーストリスは自分と祖国の名および自分の武力によってこの民族を征服した次第を記した記念柱を、その国に建てるのが例であった。また戦闘もなく容易に町々を占領できた国には、勇敢に戦った民族の場合と同様の事項を記念柱に刻んだ上、さらに女陰の形を彫り込ませたのである。それによってこの国の住民が怯懦であったことを示そうとした¹²⁾」

11) Lloyd, op. cit., p. 83.

この記念柱の設置についての記述は、単に神宮たちからの情報のみによるのではなく、ヘロドトスの実体験に裏付けられたものでもある。ヘロドトスは、セソーストリスの建立と思わしき碑文や女陰が刻まれた記念柱をパレスティナで目撃したというのである¹³⁾。これによって、セソーストリスの記念柱のエピソードは真実味を持って読者に伝えられたことだろう。

また、ダレイオス1世の功績がセソーストリスと比較される、後の時代のエピソードは印象的である。これは、ヘパイストス神殿でダレイオス1世が、セソーストリスの像の前に自身の像を建立しようとした際、この王の業績がセソーストリスのそれに劣るため、神官団によって反対されたというものである。ここで登場するダレイオス1世は、ヘロドトスやその読者の記憶に新しい、アケメネス朝最盛期の強力な支配者である。ヘロドトスの記述は、このような「大王」とセソーストリスを対比させることで、セソーストリスの功績をより一層際立たせているといえる。

以上のように、セソーストリスは、国外では軍事力によってエジプトに隣接する南北地域を征服し、また弟による謀反の鎮圧や運河の開鑿を代表とする国内整備に努め、精力的な支配を行う強力なファラオとしてヘロドトスによって描かれていることが分かる。彼の活躍は、『歴史』に登場するファラオの中で最も紙幅を割いて伝えられており、後述する史実との一致が確認できるように、その内容の質の高さも群を抜くものである。それでは、このセソーストリスは、実在のいかなる王をモデルとして描かれたのか。次節で考察していく。

(2) セソーストリスのモデル

従来、セソーストリスは、第19王朝のラムセス2世と同定されていた¹⁴⁾。これは、セソーストリスのアジアでの活動が、同じくアジアを舞台としたラムセス2世のヒッタイトとのカデシュに戦いを彷彿させるためである¹⁵⁾。しかし他方で、20世紀初頭のK. Setheは、セソーストリスの名前の分析から、この王を第12王朝の三人のセンウセレトのいずれか

12) Hdt., 2, 102.

13) Hdt., 2, 106.

表③：第12王朝王一覧

(Cambridge Ancient History 3rd ed, vol. 1, part. 2 - vol. 6, Cambridge, 1971 - 1994参照)

代	誕生名nomen/ 「ラーの息子」名	即位名prenomen/ 「上下エジプト王」名	前王との 共同統治(年数)	治世年※紀元前
1	アメンエムハト1世	Shetepibre	-	1991 - 1962
2	セウセレット1世	Kheperkare	10	1971 - 1928
3	アメンエムハト2世	Nubkaure	2	1929 - 1895
4	セウセレット2世	Khakheperre	3	1897 - 1878
5	セウセレット3世	Khahaure	-	1878 - 1843
6	アメンエムハト3世	Nymare	-	1842 - 1797
7	アメンエムハト4世	Makherure	-	1798 - 1790
8	ソベクネフェル(女王)	Sobkkare	-	1789 - 1786

と同定した¹⁶⁾。近年では、このSetheの論が受け入れられ、セソーストリスは第12王朝のセウセレットのいずれかとする説が有力となっている¹⁷⁾。そこで本節では、この第12王朝の王たちの事蹟を基にヘロドトスの記述を考察し、セソーストリスの人物像に迫る。

第12王朝に所属する王は、表③で示す通りである。碑文史料から第12王朝の治世には活発な遠征活動が確認できる。最も多く確認できるのが、エジプトの南部に接するエチオピア、すなわちヌビアへの遠征である。初代のアメンエムハト1世の名前が刻まれた記念碑が、ナイル川第1・第2カタラクトの中間に位置するコロスコから発見されており、第12王朝におけるヌビア遠征の嚆矢を確認することができる¹⁸⁾。さらに、息子セウセレット1世はその治世18年目に、ヌビアとの境界線を父よりもさらに南のワディ・ハルファへ押し進めた¹⁹⁾。エジプトの史料上に、初めてクシュ王国の名が登場し始めるのもこの王の治世である²⁰⁾。W. C.

14) A. D. Godleyはラムセス2世をセソーストリスのモデルとして挙げる。A. D. Godley, *Herodotus, the Persian Wars, Book I-III*, Cambridge, MA., 1926, p. 389, n. 1; 松平千秋は、異論を認めつつもラムセス2世と同定する。また藤縄謙三は、後述するセウセレットの可能性を示しつつも、国外遠征の業績からラムセス2世と同定する。もっとも、三者はあくまでヘロドトスの註釈としてセソーストリスの解説を行うため、歴史事実と関連させた具体的な考察では無い。松平千秋訳『歴史』(上)、岩波書店、1971年、490頁(255・2)；藤縄、前掲書、168頁。

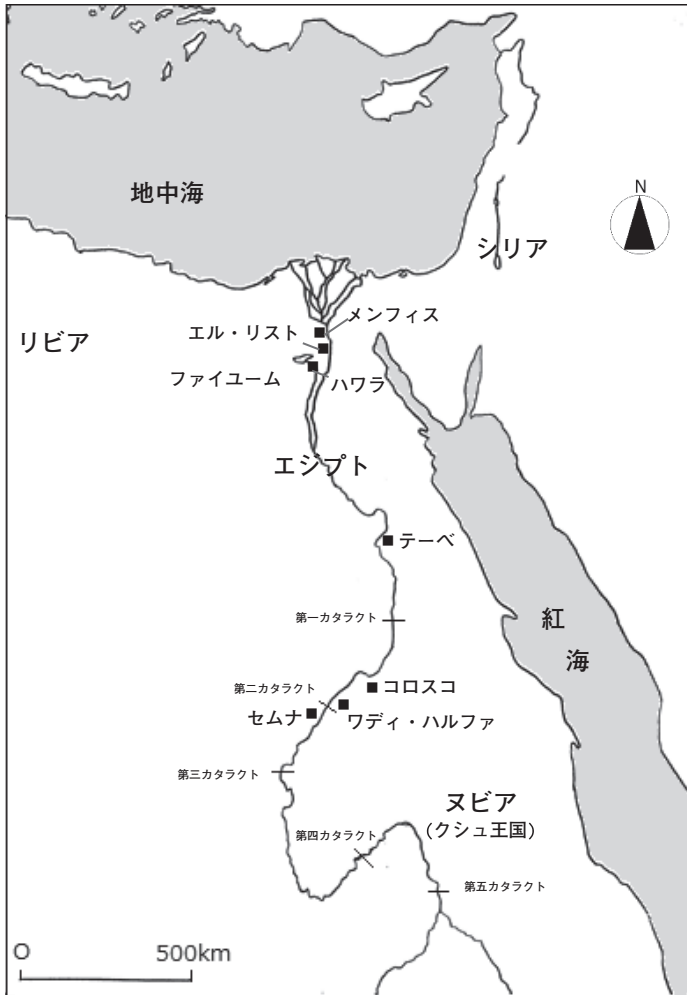
15) A. Burton, *Diodorus Siculus, Book I, A Commentary*, Leiden, 1972, pp. 163 - 165.

16) K. Sethe, *Der Name Sesostris*, ZAS 41, 1905, pp. 43-57. セウセレットのエジプト語表記はS-n-wsr̄tであり、ここからセソーストリスへの表記の変換が推測されている。セウセレットは、「女神ウスレトWosretの息子」の意味である。Lloyd, op. cit., p. 18; Burton, op. cit., p. 166.

17) Burton, op. cit., p. 164; Asheri, Lloyd, & Corcella, op. cit., p. 313; Dilley, p. 93 et 313.

地図②：エジプト・ヌビア地図

(I. E. S. Edwards, *The Early Dynastic Period in Egypt*, *Cambridge Ancient History*, vol. 1, part. 2, Cambridge, 1971, p. 2, et 48を参照し、筆者作成)



Hayesによれば、続くアメンエムハト2世とセヌセルト2世の親子は、対外遠征を行っていない²¹⁾。この親子は、先の二王によって獲得された領域を管理・運営し、これによって鉱山資源を開発することで、国内の繁栄に貢献した²²⁾。さらに、セヌセルト3世は治世8年目、先のセヌセルト1世により設置された南部の境界ヘフ（現在のセムナ）に記

念碑を設置し（セムナ第一碑文²³⁾）、さらに治世16年目に同地に要塞を建設している（セムナ第二碑文²⁴⁾）。特に、セムナ第二碑文には、ヌビア人を蔑む表現があり、ヘロドトスの記念柱のエピソードに通じるものが確認できる²⁵⁾。以上のように、南部のヌビアに対する積極的な支配体制は、王朝末期のアメンエムハト4世やソバクネフェルの治世を除いた、第12王朝の治世大半を通して確認することができる。ヘロドトスによるセソーストリスのエチオピア征服についての記述は、以上で挙げた第12王朝におけるヌビアでの活発な活動に当てはまる。

さらに、第12王朝には、アジア方面への遠征活動も確認できる。J. Geeによれば、初代のアメンエムハト1世からアメンエムハト4世までの各王は、シナイ半島への遠征を行った²⁶⁾。中でも、碑文史料から名高いのは、アメンエムハト1世とセンウセレト1世の共同統治時代と、センウセレト3世治世のアジア遠征である²⁷⁾。また、センウセレト1世の治世を舞台とする『シヌへの物語』には、レバント地方についての記述が確認できる。この『シヌへの物語』は、最古の写本がアメンエムハ

18) アメンエムハト1世の遠征活動は、文学作品である『アメンエムハトの教訓』においても記されている。杉勇『古代オリエント集』、筑摩書房、1978年、527-529頁；J. H. Breasted, *Ancient Record of Egypt*, vol. 1, Urbana and Chicago, 1906, p. 228 (§473)。W. C. Hayesによれば、この遠征は息子であるセンウセレト1世との共同統治の最中に行われ、センウセレト1世も携わった。W. C. Hayes, *The Middle Kingdom in Egypt, Internal History from the Rise of the Heracleopolitans to the Death of Ammenemes III*, *Cambridge Ancient History*, vol. 1, part. 2, Cambridge, 1971, p. 497.

19) Breasted, op. cit., pp. 248-249 (§512)

20) Hayes, op. cit., p. 499.

21) Ibid, p. 503.

22) アメンエムハト2世の鉱山資源の獲得についてはBreasted, op. cit., pp. 273-274 (§600-603)。また、アメンエムハト2世の治世末、センウセレト2世の共同統治時代に第3～第4カタラクトの間に位置するワウトの要塞に役人を派遣している。Breasted, op. cit., p. 278 (§616)。

23) Breasted, op. cit., pp. 293-294 (§652)。

24) Ibid., pp. 294-297 (§656-660)。

25) Ibid., pp. 295-296 (§657)；A. B. Lloyd, *Ancient Egypt*, Oxford, 2014, p. 130.

26) J. Gee, Overlooked Evidence for Sesostriis III's Foreign Policy, *Journal of the American Research Center in Egypt* 44, 2008, pp.23-31.

27) アメンエムハト1世とセンウセレト1世の遠征については、Breasted, op. cit., p. 227 (§471)。センウセレト3世治世の遠征については、Ibid., pp. 304-305 (§680-681)。

ト2世治世に確認できる文学作品である。その内容を大まかに述べると、次の通りである。アメンエムハト1世暗殺の報が、リビア遠征中の王子センウセレット（後のセンウセレット1世）の耳に届く。そこで、王子は他の王位を狙う者を出し抜き自身が即位するための策略を練るが、これを偶然耳にした貴族の若者シヌヘは、自身の身の危険を感じパレスティナへ逃亡する。長い年月の後、シヌヘは、センウセレット1世から帰国の許可を得て故郷へ帰還するという物語である。この作品はフィクションであるが、アメンエムハト1世の暗殺や王子センウセレットのリビア遠征など、史実が反映されていることが明らかである。また、Geeはこの作品から、レバント地方沿岸部についての当時のエジプトの地理的知識の深さを読み取っている²⁸⁾。すなわち、少なくともこの文学作品の写本が確認できるアメンエムハト2世治世には、既にエジプトとレバント地方との密接な交流があったと分かる。セソーストリスのアジア征服のエピソードは、以上のような第12王朝のアジア方面での活動と当時のレバントとの交流とから派生したのだろう。

また、ヘロドトスはセソーストリスによる運河の開鑿についても伝える。史料上では、これを行った第12王朝の王を特定することができないが、センウセレット3世治世の「運河碑文」からは、第12王朝の開鑿事業の一端を見ることができ²⁹⁾。この碑文によれば、センウセレット3世は治世8年目に、クシュ王国との戦闘のため既存の運河について改修を命じている。すなわち、運河は既にセンウセレット3世治世、もしくは、それよりも前の王の時代から存在していたことになる。セソーストリスの運河の開鑿についての記述も、このような第12王朝の史実が反映されたのだろう。

以上を踏まえると、ヘロドトスの提示するセソーストリスは、第12王朝における複数の王の業績を集約した人物であり、特定の王と同定することは不可能であるように思われる。G. Callenderが述べるように、セソーストリスは、第12王朝の複数の王の要素が複合的に統合されたキャラクターであると結論づけられるだろう³⁰⁾。研究者によって、セソーストリスをこれらの王たちの内の一人として特定するか、該当の王たちを

28) Breasted, op. cit., pp. 233–239 (§ 490–496); Gee, op. cit., p. 25; Gardiner, op. cit., pp. 130–131.

29) Breasted, op. cit., pp. 291–292 (§ 647)

混成して一人の人物とするかは意見が分かれるが、その中でも、しばしばセンウセレット1世とセンウセレット3世がそのモデルとして名前を挙げられる³¹⁾。

ただし、セソーストリスについて考察する上で、ヘロドトスの「エジプト史」には十分な注意を払わねばならない。表②に示したように、ヘロドトスが扱う王は、その大半が実在の王との同定が可能である³²⁾。ヘロドトスによると、セソーストリス (No. 4) の前に登場するモイリス (No. 3) は、湖の開鑿とその地でのピラミッド建設という記述から、ハワラのピラミッドを建設した第12王朝6代目のアメンエムハト3世を指すと考えられる³³⁾。さらに、ヘロドトスがモイリスとセソーストリスの後にピラミッドを建設したとする三人の王、ケオプス (No. 8)、ケブレ (No. 9)、ミュケリノス (No. 10) は、ギザの三大ピラミッドで名高い第4王朝のクフ、カフラー、メンカフラーを指していることは明らかである。しかし、これらの王の時系列と、現在エジプト学で認められている王の即位順とを照らし合わせると、アメンエムハト3世と同定されるモイリスが、いずれかのセンウセレットと同定されるセソーストリスの前に配置されており、さらに、第12王朝の王と同定されるモイリスやセソーストリスの後に、第4王朝のピラミッド建設の三人の王が配置されている。つまり、ヘロドトスの「エジプト史」には、明らかな時系列の混乱が認められる。これは恐らく、Lloydが指摘するように、モイリスの他には「光彩を放つ人物がない」という神官の発言によって、ヘロ

30) G. Callender, *The Middle Kingdom Renaissance, The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, 2000, p. 164.

31) センウセレット3世のみとするのは、Waddell, op. cit., p. 66, n. 1. センウセレット1世とセンウセレット3世とするのは、Lloyd, *Herodotus, BookII, Commentary 99-182*, p. 16; Butron, op. cit., p. 164; Verbtugghe & Wickersham, op. cit., p. 196. また、Gardinerはセンウセレット2世とセンウセレット3世を併せセソーストリスとしている。Gardiner, op. cit., p. 439.

32) No. 6 プロテウスについては、実在が疑問視されている。Lloyd, *Herodotus, BookII, Commentary 99-182*, p. 322.

33) 「彼〔モイリス〕の建立に成る、ヘパイストス神殿北方の楼門は彼の治世を偲ばせる不滅の記念碑であり、また湖を開鑿し（この湖の周囲が何スタディオンに及ぶかは後に記す）、その湖中にピラミッドを建てた。」Hdt., 2, 101. アメンエムハト3世のハワラ・ピラミッドについては、ワディ・ハンママートの碑文に石材の輸送の記録が残る。Breasted, op. cit., pp. 313-314 (§ 708-709). なお〔 〕内は筆者による補い。また、アメンエムハト3世以外にも第12王朝にはファイユームの開発が顕著である。

ドトスがセソーストリスやピラミッドの建設王たちを、先の330名に含めず、モイリスよりも後の王だと勘違いしたためであろう³⁴⁾。いずれにせよ、ヘロドトスの記述を基に、「エジプト史」の時系列を捉えることは避けるべきである。しかし、セソーストリスについての記述には、先述のように史実として認められる第12王朝の諸王の功績が反映されており、ヘロドトスの扱う諸王の個々のエピソードについては無下に扱うべきではないといえるだろう。藤縄謙三はヘロドトスの王の順序の混乱について、ヘロドトスの手稿本がその順番を誤って筆写されたためだとも指摘する³⁵⁾。

ヘロドトスによるセソーストリスの像には、時系列の混乱が認められるものの、その史実性は評価することができる。また、彼のセソーストリス像からは、外敵というカオスの排除と、国民へ安定した生活を提供するというマアト（宇宙秩序）の維持の役目を全うする君主の姿勢も確認できる。マアトの維持とは、エジプト古来の王権概念に基づくファラオの役割である。すなわち、このセソーストリス像には、伝統的なファラオの姿が描かれているのである。ここから、Lloydは、ヘロドトスによるセソーストリスの逸話には、理想的なファラオのモデルが示されていると述べる³⁶⁾。

ヘロドトスの後、このセソーストリスは実在の王として、前4世紀のアリストテレスの著作2点でも描かれる。そこでは、この王の知名度を前提として、彼の功績である運河の開鑿と、職業分離の法制定について述べられている³⁷⁾。前者はヘロドトスの記述に共通するといえるが、後者についてはヘロドトスの記述には確認できないため、アリストテレスのセソーストリスに関する情報源が、ヘロドトスのみに由来しているのではないことが分かる。前4世紀にはヘロドトスの叙述以外からもファラオ・セソーストリスはギリシア世界で知られた存在となっていたのであろう。では、続くマネトン『エジプト史』において、このセソーストリスがどのように扱われたのか。次章で確認していく。

34) A. B. Lloyd, *Herodotus, BookII, Introduction*, Boston, 1962, pp. 185-189.

35) 藤縄、前掲書、169頁。

36) Asheri, Lloyd & Corcella, op. cit., p. 313.

37) 運河の開鑿については、アリストテレス『気象論』、1、14 (352b)；職業の分離については、アリストテレス『政治学』、7、10 (1329b)

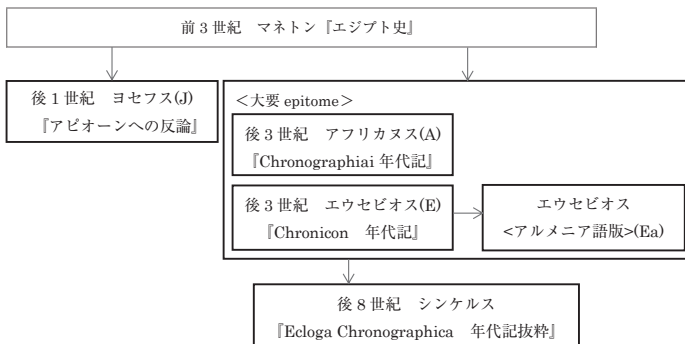
2. マネトンのセゾーストリス

(1) 『エジプト史』におけるセゾーストリスの扱い

マネトンの『エジプト史』は、ヘロドトスの『歴史』より2世紀後の前3世紀に成立した。『エジプト史』のオリジナル・テキストは現存せず、後世の引用の再構成によってその概要を知ることができる。

『エジプト史』の引用は、おおまかに図①のように二つの系統で示すことができる。一つは、後1世紀のフラウィウス・ヨセフスの『アピオンへの反論』における引用であり、ここではヨセフスが自身の主張の裏付けのため、『エジプト史』の一部を断片的に抜き出している。もう一つの系統は、後3世紀のキリスト教史家であるアフリカヌスとエウセビオスによる引用であり、両者の著作を後8世紀のシンケルスがさらに引用している。またエウセビオスについては、シンケルス版とは別にアルメニア版が存在する。この3種の引用は、歴代の王を出自や家系によって、30もしくは31の王朝に分けナンバリングしており、各王朝に属する王、治世年数、さらに王によっては治世中の出来事や業績、王の身体的特徴を簡条書きのように記録している³⁸⁾。そのため、後者のアフリカヌスやエウセビオスによる引用は、先行研究において『エジプト史』の「大要 epitome」として扱われている。この「大要」において、ヘロドトスがモデルとした王たちと同じく、マネトンもセゾーストリスを第12王朝

図① 『エジプト史』引用



38) 『エジプト史』に収録されている王朝の範囲については、第30王朝までとする説と、第31王朝を含む説とで議論が分かれる。詳細は星野、前掲論文、9頁。

に位置づけている。一方、前者のヨセフスによる引用は、「大要」で示されるところの第13王朝から第19王朝に該当しており、セソーストリスについては収録していない。

上記の「大要」3種における第12王朝の記述は、表④の通りである。「大要」によると、第12王朝はディオスポリス出身の家系であり、7人の王で構成された³⁹⁾。各王に関する記述を比較すると、No. 2とNo. 4の王の名が、アフリカヌス版ではそれぞれ「アムマネメース Αμμανέμης」/「ラカレス Λαχάρης」、エウセビオス両版では「アムメネメース Αμμενέμης/Ammenemes」/「ラマリス Λάμαρις/ランパレス Lampares」と異なる⁴⁰⁾。さらに、アフリカヌス版では王朝末の3名についてそれぞれ名前と治世年数が明記されるが、エウセビオス両版では名前を省略し治世年数も3名の合計として示している。こうした「大要」間での相違は、第12王朝の記述のみに限らず、他の王朝の記述にも確認できる。これらの相違は、各版の成立過程における情報の取捨選択の結果であろう。実際に、『エジプト史』全3巻を通じて、「大要」の3種が完全に一致する記述は稀である。しかし、第12王朝の記述については、「大要」3種は概ね一致しており『エジプト史』のオリジナル・テキストの大枠を読み取ることができる。

表④で示す通り、セソーストリスは、『エジプト史』の第12王朝の3代目に位置する。マネトンは、冒頭でこの王の身長について「4クビトゥム3パルマ2ディグトゥム」と言及し、彼の遠征が全アジアとトラキアにまで及んだと伝える⁴¹⁾。また、ヘロドトスと同様に記念碑の設置についても記すが、ここには怯懦の性質を示す女陰の印のみではなく、勇敢な民族へは男根の印が刻まれたとも述べている。さらに、マネトンは、この王がオシリス神に次ぐ地位にあったと伝える。「大要」におけるセソーストリスの記述は、他の王たちと比較すると、いかに位置づけられるのか。

39) アフリカヌス、エウセビオス両版ともに、第12王朝に属する王の人数については、7名と述べている。Waddell. op. cit., pp. 66-72 (Fr. 34-36)；ディオスポリスは、テーベやディオスポリス・マグナとも呼ばれる。(現在のルクソール)

40) 本来アルメニア版はアルメニア語表記であるが、本稿ではWaddellで使用される Aucher, Codex Hierosolymitanus, 1818のラテン語訳を使用する。

41) セソーストリスの身長についての記述は、アフリカヌス版には確認できないが、エウセビオス両版において言及される。(表④参照)

表④⑨ネトン『エジプト史』(大要) 第12王朝一覽

(W.G.Waddell, *Meneho*, Cambridge, M.A., 1940参照)

No.	王名	A		E		Ea			
		在位 年数	事績、特記、他	在位 年数	事績、特記、他	王名	在位 年数	事績、特記、他	
1	Σεουρυνος	46	Amunemhatの息子 宦官により殺害	Σεουρυνος	46	Amunemhatの息子 宦官により殺害	Sesonchos	46	Amunemhatの息子 宦官により殺害
2	Amunemhat	38	治世9年目に全エジプト、 トラキアまでのヨーロッ パを征服。記念碑の設立。 勇敢な部族に男性の秘 部・下劣な民族には女性 の秘部を刻む。エジプト 人からオシリスに次ぐ地 位とみなされる。	Amunemhat	38	身長4ペーキエス3パライ ス ¹ 。2タクテエロス。治世9 年目に全エジプト、トラキア までのヨーロッパを征服。記 念碑の設立。勇敢な部族に男 性の秘部を刻む。エジプト人 からオシリスに次ぐ地位とみ なされる。	Amunemhat	38	身長4クビトゥム3パルマ ² テイキトゥム。治世9年目に全 エジプト、トラキアまでのヨー ロッパを征服。記念碑の設立。 勇敢な部族に男性の秘部・下劣 な民族には女性の秘部を刻む。 エジプト人からオシリスに次ぐ 地位とみなされる。
3	Σεσοστρις	48	Amunemhatの自身 の墓として迷宮を建設	Σεσοστρις	48	Sesostris	48	Amunemhatの自身 の墓として、 多くの部族を含む迷宮を建設	
4	Amunemhat	8	Amunemhat	8	Lampares	8	Amunemhat		
5	Amunemhat	8							
6	Amunemhat	8							
7	Σεσοστρις	4							

A=アフリカス版

E=エウセビウス・シケルス版

Ea=エウセビウス・アルメニア版

()内は筆者による補足

「大要」全体に視野を広げると、王個人の身体的特徴が伝えられるのは、第2王朝8代目のセソークリスの身長と、第27王朝5代目のアルタクセルクセース王の「長い手」という描写のみである⁴²⁾。また、王の軍事活動についての記述が確認できるのは、セソーストリスの他に、エウセビオス両版における初代のメネス王の国外遠征、そして第26王朝ネカオー（2世）のイェルサレム攻略のみである⁴³⁾。さらに、セソーストリスの記念碑のような、モニュメントや建造物についての言及は、第4王朝のギザの三大ピラミッドや、第12王朝のラカレスのアルシノイテ州の迷宮の他に、第1王朝のアソーティス王によるメンフィスの宮殿の建設や同王朝のウネフェース王のピラミッド建設の記述がある⁴⁴⁾。以上で挙げた通り、個人の特徴や業績を挙げる項目は他の王にも記録されている。しかし、セソーストリスについての記述は、身体的特徴や軍事活動、建造物など、記録される項目が多岐にわたっている。このように、一人の王に対して複数の項目が挙げられる王は、「大要」においてセソーストリスの他に確認することはできない。

特に、彼がオシリスに次ぐ地位にあったという点は、「大要」全体において目を引く記述である。「大要」の他の箇所でも、神話上の人物を挙げて王や登場人物の特徴を説明する記述が確認できる。例えばマネトン第3王朝の宰相イムホテプについては、医療知識に長けていたことからアスクレピオスの名前を、第23王朝オソルコーについてはヘラクレスの名前を挙げ、その人物の特徴を示している⁴⁵⁾。しかし、ここで挙げられているのは、いずれもギリシアの（半）神であり、エジプトの神ではない。エジプトの神の名前を採用し、特定の王についてその特徴や地位を説明するのは、セソーストリスが唯一の例である。

オシリスについては、既にヘロドトスがギリシアの半神であるディオニュソスとの同一視について述べており、マネトンの時代には、この考えが認知されていたはずである⁴⁶⁾。それにも関わらず、マネトンはセソー

42) 第2王朝セソークリスはWaddell, op. cit., Fr. 8, 9、第27王朝アルタクセルクセースは、Ibid., Fr. 71, (a).

43) 第1王朝メネスはIbid., Fr. 7、第26王朝ネカオー（2世）はIbid., Fr. 68, 69.

44) 第1王朝アソーティスはIbid., Fr. 6, 7.

45) アスクレピオスについては、Ibid., pp. 40-45 (Fr. 11-12)、オソルコーについてはIbid. pp. 160-163 (Fr. 62-63).

46) Hdt., 2. 144.

ストリスについて、ディオニュソスではなく、オシリスの名前を使用している。これは恐らく、ディオニュソスと共通する豊饒の神としてのオシリスの神性ではなく、エジプト独自の王権概念における「ファラオの父」としてのこの神の地位を強調するためであろう。すなわち、オシリスに次ぐ地位というのは、その息子ホルスを連想させ、セソーストリスの「地上のホルス」たるファラオとしての地位を読者に強調しているといえる。

マネトンのセソーストリスの記述は、「大要」であるが故に簡略的な記述であることは否めない。しかし、本節で見えてきた通り、この王がマネトンによって特別な存在感を持って描かれていたことは明らかである。次節では、ヘロドトスの記述との比較を行い、マネトンが描くセソーストリス像を明確にしていく。

(2) ヘロドトスとの比較

マネトンはヘロドトスの『歴史』を強く意識している。王名に関して、マネトンは第1王朝のメネス、第4王朝のスーフイスの両項において、「ヘロドトスが言うところの…」と述べ、ヘロドトスを名指しして彼の使用する王名を訂正しているのである⁴⁷⁾。このように、マネトンはヘロドトスが既に言及している王を扱う際、その例に倣わず、あえて自身で王名をギリシア語に変換している。それにもかかわらず、セソーストリスに関して、マネトンはヘロドトスの表記を採用しているのである。ヘロドトスとマネトンの王名を比較すると、第26王朝の諸王について非常に似た表記が確認できる⁴⁸⁾。エジプト・ギリシア間の交流が、前7世紀の第26王朝治世から確認できることから、当時既にエジプトの王の名前がギリシア語で表記されていたと推察することができる⁴⁹⁾。そのため第26王朝において、ヘロドトスとマネトンとの王名表記が似るのは、納得

47) 星野、前掲論文、13-14頁。

48) 第26王朝のプサメティコス(1世)については、ヘロドトス、マネトンともに $\Psi\alpha\mu\mu\eta\tau\alpha\chi\omicron\varsigma$ として表記が一致している。Hdt., 2. 151; Waddell, op. cit., Fr. 68-69. また、同王朝ネコ(2世)については、ヘロドトスが $\text{N}\epsilon\chi\omega\varsigma$ (Hdt., 2. 158)、マネトンが $\text{N}\epsilon\chi\alpha\omega$ と表記し、アマシスについては、ヘロドトスが $\text{A}\mu\alpha\sigma\iota\varsigma$ (Hdt., 2. 162)、マネトンが $\text{A}\mu\omicron\sigma\iota\epsilon$ と表記している。(マネトンの表記については全て Waddell, op. cit., Fr. 68-69)

49) エジプトとギリシアの交流については、J. Boardman, *The Greeks Overseas*, London, 1964, pp. 111-159.

のできる現象であろう。しかし、それに先立つ第12王朝の王について、その名前のギリシア語表記が確立していたとは考えにくく、ヘロドトスとマネトンで王名の表記が一致するというのは、おそらく偶然ではない。すなわち、この一致からはヘロドトスの表記を受け入れたマネトンの姿勢を窺うことができるのである。このようなセソーストリスについてマネトンがヘロドトスに従う姿勢は、『エジプト史』全体において例外的であるといえるだろう。

先述の通り、マネトンもヘロドトスと同じく、やはりセソーストリスを第12王朝に位置づけている。しかし、マネトンの記述にも、現在のエジプト学で認められる王の配置との違いが確認できる。表④で示す通り、マネトンの第12王朝はセソコンコーシスで始まり、その次のアムマネメースは宦官によって殺害されたとされる。この宦官によって殺害された王は、明らかに文学作品『シヌへの物語』や『アメンエムハトの教訓』のモデルになった、表③の第12王朝初代のアメンエムハト1世を指している⁵⁰⁾。また、マネトンの第12王朝において4代目のラカレースが迷宮を建設したという記述は、表③の6代目アメンエムハト3世によるハワラのピラミッド建設と同定することができる。つまり、マネトンは第12王朝において、A. Gardinerの述べるように、初代のアメンエムハト1世と3代目のアメンエムハト2世を混同している、もしくは、3代目のアメンエムハト2世と4代目のセンウセレット2世を削除し、そこにアメンエムハト1世を挿入してしまっている⁵¹⁾。以上から、マネトンのセソーストリスは、ヘロドトスの想定する王とおおよそ一致しており、センウセレット1世とセンウセレット3世を混成したキャラクターだといえる。特に、センウセレット1世については、ファイユーム東のエル＝リスト発見の碑文から、第12王朝治世中の神格化が確認されており、この信仰はその後の新王国時代にも継続が確認されている⁵²⁾。セソーストリスの「オシリスに次ぐ地位」というマネトンの記述は、この王との同定を示唆しているようにも思われる。

さらに、ヘロドトスとマネトンを比較すると、とりわけセソーストリスの遠征に関して、二人の記述には一定の一致を見ることができる。マ

50) 『アメンエムハトの教訓』は註18)を参照。

51) Gardiner, op. cit., p. 130.

52) Hayes, op. cit., p. 502; Burton, op. cit., p. 164.

ネトンによれば、セソーストリスの遠征活動は、全アジアやトラキアまでのヨーロッパに及んだ。ここには、ヘロドトスが記載するようなアラビア湾や紅海、さらにはエチオピアについての言及がなく、その情報が省略された印象を受ける。もちろん、これは「大要」という体裁が一因として考えられる。それよりもヘロドトスとマネトンの類似する記述に着目すべきである。というのも、『エジプト史』の他の例を考慮すると、ヘロドトスの記述にマネトンの認識との相違があれば、先の王名の例のように、マネトンはその記述を著書の該当部分で随時訂正したはずである。マネトンが、ヘロドトスと共通する記念碑のエピソードを採用していることから、明らかにマネトンはヘロドトスの記述を認めており、一部ではそれを踏襲さえしていることがわかる。さらに、オシリスに次ぐ「地上のホルス」としてセソーストリスの地位を明記することで、マネトンはこの王についてエジプトの伝統的観念に乗っ取り、ヘロドトスによる「理想のファラオ」としての側面を、より強調しているのである。

ところで、マネトンの『エジプト史』は、歴代の王たちを王朝によって区分し、その連続を途絶えることなく伝えている。一方、ヘロドトスの叙述は、語るべき「光彩を放つ」王のエピソードのみを選出し、その他の王たちを除外した、いわば断片的な「エジプト史」である。つまり、マネトンは、ヘロドトスから継承した「理想のファラオ」の像を自身『エジプト史』の中で扱うことで、その像に対してより具体的な年代設定を施し、その存在に説得力を持たせたのである。

マネトンの『エジプト史』は、先述の通りエジプト固有の王名表の伝統を基盤としている。しかし、『エジプト史』に含まれるセソーストリスについての記述には、共通する王名の表記、遠征の範囲や記念碑の設置といったエピソードから、ギリシアの歴史叙述であるヘロドトスの記述を踏襲していることが確認できる。さらにマネトンは、ヘロドトスのセソーストリス像に「オシリスに次ぐ地位」を付与することで、よりエジプトの王権概念に相応しいファラオを描き出した。そして、『エジプト史』において連続する王の中にこのセソーストリスを位置づけることで、この王は、マネトンによって実在した強力なファラオとして、その存在を裏づけられたのである。マネトンのセソーストリスについての記述は、『エジプト史』におけるエジプトの王名表とギリシアの歴史叙述の融合を象徴しているといえるだろう。

3. セソーストリス像の継承

マネトンの後にも、セソーストリスはギリシア・ローマの様々な著作に登場する⁵³⁾。特に、前1世紀のディオドロス・シケロスの『ビブリオテーケー』が顕著である。作中で述べられるように、ディオドロスのエジプトに関する記述は、前3世紀のアブデラのヘカタイオスに依拠しており、マネトンと同時代もしくはわずかに古い情報を基にしていると考えられる⁵⁴⁾。ディオドロス、もしくは彼が依拠したヘカタイオスはヘロドトスよりも時代が下るため、より多くの王朝時代のファラオに言及している(表⑤)。

表⑤に示す通り、ディオドロスの王の配置については、先のヘロドトス及びマネトンの二人に比べ、さらに混乱が確認できる。ディオドロスは、初代メナスに続いて、その後の王たちの治世について述べるが、その年代を明記しない。メナス王に続いて、後述するセソオーシスを含む第12王朝の王たちについて述べるが、その中に第18、もしくは第26王朝の王であるアマシスや、第25王朝に属すると思われるエチオピア人の王を織り交ぜている。さらにその後、第4王朝のピラミッド建設王たちを配置しているのである。また、ディオドロスは、実在が不確かな王の逸話を挿入し、さらに実在の王の功績について別の王を立て、功績を分けて記載するなど、その記述には多くの間違いを指摘することができる。おそらく、ディオドロスが依拠したヘカタイオスの記述による影響もあるのだろう。ヘロドトスと同じく、ディオドロスの「エジプト史」も特記すべき王にのみ焦点を当てるため、マネトンとは異なる断片的な「エジプト史」となっている。

その中で、セソーストリスと同一人物であると考えられているのが、セソオーシスである(表⑤、No. 10)。ディオドロスはこの王をモイリスの7代後に位置づけ、その冒頭と末尾で、先人の王たちの誰よりも名声を得、より優れた偉業を成し遂げたと評価する⁵⁵⁾。さらに、先のギリ

53) C. Obsomer, *Les campagnes de Sésostris dans Hérodote: essai d'interprétation du texte grec à la lumière des réalités égyptiennes*, Bruxelles, 1989, pp. 33-35が詳しい。

54) Diod., 1, 46.

55) Diod., 1, 53.

表⑤：ディオドロス『ペリオプテークー』登場王朝時代エジプト王一覧

(A. Burton, *Diodorus Siculus Book I, A Commentary*, Leiden, 1972, *Cambridge Ancient History* 3rd ed. vol. 1, part. 2 – vol. 6, Cambridge, 1971–1994参照)

No.	第1巻	王名	同定される実在の王	記述内容
1	1.45	メネシス	(第1王朝、初代)	
2		トナネバクトス	(第24王朝、初代)	※1.65登場のボツコリスの父を指すか。アラビアへ遠征。賢者ボツコリス。Thephachusの息子※1.65と同一人物か。
3		ボツコリス	(第24王朝、2代目)	メナスの後即位。その後、子孫8人が王になる。
4		アソリス (1)	特定できず	アソリス (1) の8代後同名の王が即位。ディオドロスを建設。
5		アソリス (2)	特定できず	年代について言及なし。墓の説明。
6	1.47	オシエソソテアス	ラメセス2世 (第19王朝、3代目)	前王から8番目、メソフィアスの建設。
7	1.50	ウコレウス	特定できず	メソフィアス建設のウコレウスの娘ヒナイル川の神の間に生まれる。
8	1.51	モイギエゾトウス	特定できず	アキエゾトウスの12世代後、淵を掘る。モイリス淵と呼ばれる。
9		モイリス	アメンエムハト3世 (第12王朝、6代目)	アキエゾトウスの7代後、即位。王子時代にアラビア・リビア征服。36のノモスの設置。エチオピアへ進軍。紅海 (現インド洋) の下、ペルシヤ沖へ船隊を派遣。初の軍艦を建設。インド沿岸の征服。陸路で全アジヤ征服。カンジス河を越え、全インドを海まで。ヌキエタイ人についてもタチイヌ川 (現在のトソ川) まで。アエオチエイス淵 (コルクス人の住む) にもエソソト人の痕跡。キエウラチスも征服。トラキヤで感血の限界を越し記念碑を建立。
10	1.53	セソオーシス (1)	セソウセリト2世 (第12王朝、4代目) / セソウセリト3世 (第12王朝、5代目)	
11	1.59	セソオーシス (2)	セソウセリト3世 (第12王朝、5代目)	女王の名前も継承。盲目。
12	1.60	アソリス	(第26王朝、6代目/第18王朝、初代)	セソオピテア人の王。エソソトがエチオピアの支配下に。
13		アソテイサネス	特定できず (第25王朝?)	エチオピア王の後、メソフィスもしくはアロスと呼ばれる。軍事的功績はない。墓としてラビュリントス (港宮) 建設。
14	1.61	メソフィス / アロス	アメンエムハト3世 (第12王朝、6代目)	5世代に渡る主の不在の後即位。ギリシア人はトロイア戦争頃と認識。
15	1.62	アテスアプロテウス	特定できず	アテスの息子。富の集中。先の王達の中で最大の財貨を残す。
16		レンピス	ラメセス2世 (第19王朝、3代目) / ラメセス3世 (第20王朝、2代目)	
17	1.63	次の7代は野人		例外はネイレウス。
18		ネイレウス	特定できず	ナイル川の諸説となる。それまでは川の名前はアキエゾトスだった。連年の開墾によりナイル川を活用。メソフィスの出身。統治50年。8代目の王。大ピラミッド建設。※ピラミッド建設の異説 (Diod. 65) : 第一基をアラルイオス、第二基をアモシス、第三基をイナロスのものとする。
19		ケンミス	クア (第4王朝、2代目)	ケンミスの兄弟。メソフィスとも呼ばれる。第三のピラミッド建設。
20	1.64	ケレソソカウルエース	カフラー (第4王朝、4代目)	ミユケリノスの次代。
21		ミユケリノス / メンテリノス	メンカフラー (第4王朝、6代目) (5代目)	ボツコリスの最後、エチオピア王はエジプトから引き上げる。その後、2年間の王の不在。国内の混乱 → 12名の同盟による15年間の統治。
22	1.65	ボツコリス	第23王朝、2代目	ボツコリスの没後、エチオピア王はエジプトから引き上げる。その後、2年間の王の不在。国内の混乱 → 12名の同盟による15年間の統治。
23		サバコン	第23王朝、初代	サバコンを最後にエチオピア王はエジプトから引き上げる。その後、2年間の王の不在。国内の混乱 → 12名の同盟による15年間の統治。
24		統治者の不在。		
25	1.66	アサメテイコス	アサメテイコス1世 (第26王朝、2代目)	
26	1.68	アソリス	(第26王朝、5代目)	アサメテイコス4代後、即位。22年間統治。
27	1.68	アソリス	(第26王朝、6代目)	アソリスによって反乱兵の元へ派遣されるも、自ら王として即位。

シア人著作家やエジプト人神官たちの、この王の認識についての食い違いを指摘し、信憑性のある情報を抜粋したと読者へ断っている⁵⁶⁾。ディオドロスによるセソオーシスのエピソードを大まかにまとめると、次の通りである。

- ・王子時代の仲間との訓練、アラビアとリビアへの遠征（ディオドロス『ビブリオテケー』、第1巻、53）
- ・罪人の恩赦、国内に36のノモスの設置（同上、54）
- ・即位後のエチオピア、紅海、全アジア（至ガンジス川）、キュクラデス、スキュタイ、タナイス川への遠征、トラキアにおける記念碑の設置（同上、55⁵⁷⁾）
- ・捕虜による神殿建設（同上、56）
- ・メンフィスから「海」に達する運河を開鑿、弟の裏切り（同上、57）
- ・他国の君主に自身が乗る二輪戦車の牽引させるエピソード、ダレイオス1世のエピソード（同上、58）

ディオドロスによる高い評価を反映して、セソオーシスについての記述は『ビブリオテケー』の「エジプト史」の中でもその情報量において群を抜いている。その内容についてはヘロドトスやマネトンと同じく、セソオーシスの軍事活動、特にそれに伴う記念碑の設置、さらに運河の開鑿を始めとする国内の整備について確認できる。名前の表記や、征服地の範囲について先の二人との違いはあるものの、その功績はセソーストリスと多くが重なることは明らかである。そのため、先行研究において、このセソオーシスは先のセソーストリスと同一人物として扱われている⁵⁸⁾。

さらに、ディオドロスの記述には、ヘロドトスやマネトンの記述には確認できない、セソオーシスの王子時代のエピソードが記されている。特に、第一章で述べた通り、王子時代のリビア遠征は『シヌへの物語』

56) Diod., 1, 53.

57) 記念碑には、「勇敢な人々の地域には、男性の秘部を、みじめで臆病者には女性の秘部」が刻まれたと、ディオドロスは述べる。

58) Burton. op. cit., pp. 163–164; K. S. Sacks, *Diodorus Siculus and the First Century*, Princeton, 1990, p. 75; F. Chamoux et P. Bertrac, *Bibliothèque historique, Diodore de Sicile ; introduction générale*, Livre 1, Paris, 1993, p. 206; Dillery, op. cit., p. 93 et 313.

で描かれるアメンエムハト1世とセンウセレット1世共同統治期のリビア遠征に一致している。また、ディオドロスは、セソオーシスの死後、息子がその名を継承し即位したと述べる(表⑤、No. 11)。表③で示す通り、第12王朝において同名の王が連続して即位するのは、センウセレット2世からセンウセレット3世のみであり、これに従うのであればNo. 10のセソオーシスはセンウセレット2世を指すこととなる。これらを踏まえると、ディオドロスの示すセソオーシスには、センウセレット1世とセンウセレット2世の要素が確認できる。ディオドロスは、ヘロドトスにはない情報を付け加え、セソオーシス、すなわちセソーストリスに新たな人物像を与えているのである。

しかし、ディオドロスの記述には、明らかな間違いが見つけられる。セソオーシスが他国の王に二輪戦車を牽引させたというエピソードである。二輪戦車は、第12王朝後の第二中間期に異民族であるヒクソスによってもたらされた新装備である。よって、セソオーシスを第12王朝の王とするならばこのディオドロスの記述は明らかな時代錯誤であり、この点はすでに多くの研究者によって指摘されている⁵⁹⁾。また、インドへの遠征も、ディオドロスが新たに追加した情報である。ディオドロスはセソオーシスの遠征が「アレクサンドロス未踏の地域」にまで至ったと述べ、その領域はアレクサンドロス3世の偉業を凌駕していると記すのである。以上のように、ディオドロスは、ヘロドトスやマネトンには確認できないエピソードや情報を入れ込み、セソーストリスの像をさらに発展させ、より偉大なファラオとして描きあげている。前述のように、ディオドロスは冒頭で「信憑性のある情報を抜粋した」と述べるが、彼の記述は明らかに誤った情報を組み込んでいる。皮肉にも彼自身、先のヘロドトスやマネトンが記した像とは食い違うセソオーシス像を描き出しているのである。

ヘロドトスとマネトンの後、セソーストリスは、様々な著作家による記述を経て、ディオドロスへ伝わったのであろう。その結果、ディオドロスは自身の納得できる情報を選び出しセソーストリス像を描き出した。しかし、ディオドロスは、セソーストリスの性質をより強力なファラオとして誇張したことで、マネトンによって「裏づけられた」セソースト

59) Burton, op. cit., p 178; M. バナール『黒いアテナー 古典文明のアフロ・アジア的ルーツII』、藤原書店、2004年(1991)、353頁でも指摘される。

リスの像の実態を蔑ろにしている。特に、二輪戦車のエピソードは明らかかな付け加えであり、マネトンがエジプト史にセソーストリスを位置付けたことが無視されているといえるだろう。ディオドロスの記述は、ヘロドトスによる強力なファラオとしてのセソーストリス像のみを追求し、この王を実態の伴わない危ういキャラクターにしてしまっているのである。

マネトンの後、セソーストリスについて述べる作家はディオドロスのみに限られない。本稿第二章でマネトン『エジプト史』の引用者として名前を挙げたヨセフスは『ユダヤ古代誌』において、パレスティナに侵攻した王をセソーストリスではなくシシャクであると述べ、ヘロドトスを名指して訂正している⁶⁰⁾。このシシャクは第22王朝初代シェションク1世を指し、旧約聖書においてパレスティナへの遠征で知られる王である⁶¹⁾。しかし、これまで述べてきたように、ヘロドトスやその後の著作家が示すセソーストリスは、第12王朝のいずれかの王である。おそらくヨセフスは、旧約聖書に記録されない人物をパレスティナの征服者として認めることができないため、先の作家の証言を否定し、セソーストリス像を都合よく自身の主張に沿わせて改変したのである。

また、後2世紀のアリアノスは『インド誌』において、セソーストリスはインドに到達する前に軍を引き返したと述べ、インドを征服したのはアレクサンドロス3世ただ一人と記す⁶²⁾。これは、明らかにディオドロスの記述と矛盾するものであるが、インドに到達したアレクサンドロス3世の功績を際立たせるため、アジア遠征で名高いセソーストリスを引き合いに出したと推察できる。

上記以外にも、大プリニウスやストラボンなどその後のギリシア・ローマの作家がセソーストリスを扱う。これらの作家たちは、この王の国外遠征や運河の開鑿の業績について、ヘロドトスあるいはディオドロスの記述を継承しているようである⁶³⁾。しかし、それらの作品で扱

60) ヨセフス『ユダヤ古代誌』、8、253。

61) 『歴代誌』、2、12。

62) アリアノス『インド誌』、5、5。

63) ストラボン『地理誌』C686-687ではヨーロッパ、トラキア、ポントス、C790ではエチオピアの征服について言及する。また、大プリニウス『博物誌』、6、165では、運河の開鑿について述べられている。

われるセソーストリスは、「エジプト史」の文脈で語られるのではなく、それぞれの作品の文脈に沿って彼の業績の一部に焦点が当てられ、比較対象や例示として用いられるのみである。作品によっては、エジプトの王としてセソーストリスの名前を挙げるのみで、その年代や、代表的な功績についてさえ語らないものもある。これらの作家たちによるセソーストリスの扱いは、この王について読者に対して詳細の説明が必要でないことを物語っている。すなわち、マネトンよりも後の古代のギリシア・ローマ世界において、強力なファラオとしてのセソーストリス像が広く認識されていたといえるだろう。

ヘロドトス以来、セソーストリスはギリシア・ローマの著作において偉大なエジプトの王としての権威が認められてきた。しかし、それ故にファラオのプロトタイプとして広く認識され、作家によってこの王の功績は変化させられていった。こうした過程の中で、マネトンがエジプトの伝統とヘロドトスの記述からその実態を裏付けたセソーストリス像は黙殺され、時代を下るごとに形骸化していったのである。

おわりに

マネトン『エジプト史』におけるセソーストリスについての記述からは、ヘロドトスに由来するギリシア歴史叙述の踏襲と、エジプト古来の概念の継承を確認することができた。このことから明らかであるように、彼の『エジプト史』をギリシアとエジプトのどちらか一つの視点から読み取るとは、本作品の側面のみを捉えているに過ぎない。『エジプト史』の本質を理解するためには、単純にエジプトの伝統やヘレニズム化といった二極化した視点に頼るのではなく、それらを含む複合的な視点で捉え考察していく必要があるのである。

前5世紀にヘロドトスによって提示されたセソーストリスは、軍事的要素の強い、マアトの維持に努める理想的なファラオとして描かれた。特に、大王ダレイオスとその功績を比較するエピソードは、セソーストリスを「大王」に匹敵する偉大な君主として読者に印象付けたことだろう。彼に続くマネトンは、このセソーストリス像を継承し、さらにエジプトの王権概念を引き合いに出すことで、この人物の伝統的なファラオとしての側面を強調した。特に、マネトンは『エジプト史』において王

たちの連続を記したため、ヘロドトスから継承したセソーストリスを、実在の王としてエジプト王朝史の中に位置づけたといえる。

Redfordによれば、第12王朝では、第11王朝から登場する私的な伝記テキストを背景に、歴代の王のリストである「王名表」が作成された⁶⁴⁾。これは、第12王朝の祖であるアメンエムハト1世が、第11王朝の宰相の出身であり、前王朝の家系に属さないことに由来する⁶⁵⁾。第12王朝の諸王は、自身の新たな王家を権威づけるため、祖先崇拝を開始し、その媒体として王名表を作成したのである。すなわち、セソーストリスは、王名表作成の萌芽期に位置する王であるといえる。セソーストリスのような英雄的な王の存在と、王名表の創成期が重なるというのは、マネトン『エジプト史』とエジプト古来の王名表の関係を考察する上で大変興味深い現象である。セソーストリスは、王名表の誕生後、王名表を通じて初めてエジプト史上に記録された偉大なファラオだったと推測できるのではないだろうか。それ故、マネトンは『エジプト史』においてセソーストリスを特別な存在感をもって、強調したのではないか。

その後のセソーストリスについての記述を確認すると、ディオドロスが先の作家たちによる記述の相違を指摘していることから分かるように、この王の功績が加味・修正されていたことが分かる。特に、国外遠征のエピソードは、マネトン以降セソーストリスを象徴するエピソードとして、形を変えて後の作家たちに継承されていった。その過程で、セソーストリスは「大王」アレクサンドロスと比較され、さらに、ファラオのプロトタイプとして認識されることとなった。つまり、時代を下るにつれ、ギリシア・ローマの著作においてセソーストリスはその実態が無視され、「偉大なファラオ」の像として独り歩きするようになっていったのである。マネトンは、ヘロドトスが描き出したセソーストリスを「歴史上」に位置づけたという点において、他の作家とは一線を画す。しかし、マネトンの記述は後世の作家たちには受け継がれず、セソーストリスはフィクションとしての性質を強めていったのである。

64) Redford, op. cit., p. 128.

65) アメンエムハト1世の出自については、Gardiner, op. cit., p. 126; Hayes, op. cit., p. 495; Lloyd, Ancient Egypt, p. 11.